

平成 22 年
5 月 27 日

病害虫発生予報 6 月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目 次 >

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病(葉いもち), イネドロオイムシ	1
ナシ：黒星病, ナシヒメシンクイ	2
果樹共通：カメムシ類(越冬世代)	2
夏ネギ：べと病	3
小麦：赤かび病	3

【その他の病害虫】	4
水稲, ナシ, ブドウ, カキ, 夏ネギ, スイカ, 半促成ピーマン, 抑制トマト	

. 病害虫ミニ情報

水稲の主な病害虫と防除対策について	6
ネギべと病について	7

. 今月の気象予報	8
-----------	---

. テレホンサービス	8
------------	---

029(226)5321

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報検索システム」(<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vt11m000.html>)で確認することができます。

水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とすること。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

5月下旬現在、置苗でのいもち病の発生は、例年どおり認められない。

気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想されるが、気温は平年並か低いと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

発生好適条件：気温 20～25 で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間ぬれるような条件のとき。一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

置苗はいもち病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等処分する。

常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。

例年6月下旬から発生するので、粒剤で本田防除する場合には適期を逃さずに防除する。

粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。

中干し等の栽培管理を徹底し、イネの健全育成に努める。

水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間は1週間程度とすること。

(P.6 病害虫ミニ情報 参照)

2. イネドロオイムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

5月下旬現在、越冬成虫の発生量及びイネへの産卵数は平年よりやや多い。

気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多く、日照時間は平年より少ないと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

育苗箱施用剤を使用していない水田では、曇雨天が続く場合は注意が必要である。また、霧が発生する地域等では発生が多い傾向がある。

長期に曇雨天が続く場合は、育苗箱施用剤を使用している場合でも、6月中旬以降に発生が多くなることがある。

例年の発生推移としては、幼虫が6月上旬頃から発生し、6月下旬に被害が最も多くなる。

7月上旬には終息するが、幼虫の発生が多く、食害が目立つ場合は防除を行う。

(P.6 病害虫ミニ情報 参照)

ナ シ

1. 黒星病
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

5月下旬現在、発病葉率及び発病果率は平年並である。
 5月下旬現在、県予察圃場（笠間市）の発病果率は平年より高い。
 本菌の越冬量は平年より多い。
 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か低く、降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

発病した果そう基部、葉及び果実は二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、土中深く埋めるなど適切に処分する。
 発病が確認された圃場では、発病部位を除去した後に薬剤防除を行う。本菌は感染してから発病までの潜伏期間が約20日と長いため、薬剤散布は雨の合間をみて行う等、間隔が空かないように注意する。
 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

5月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺時期は平年並、誘殺数は平年並～やや多い。
 5月下旬現在、被害果の発生は例年どおり認められない。

[防除上注意すべき事項]

今後、次世代成虫（第1世代）が発生するため、参考防除例に従って適期防除に努める。
 薬剤散布は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

果樹共通

1. カメムシ類（越冬世代）
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや少ない	県下全域

(果樹共通 カメムシ類 続き)

[予報の根拠]

本年 2 月の山林での越冬量調査におけるチャバネアオカメムシの越冬成虫数は平年よりやや少ない。

5 月下旬現在, 果樹園に設置した予察灯(かすみがうら市)へのチャバネアオカメムシの誘殺数は平年並である。

5 月下旬現在, サクラのたたき落とし調査では, チャバネアオカメムシの発生量は平年並～やや少ない。

[防除上注意すべき事項]

夜温が高いと活動が盛んになり, 果樹園へも飛来するので, 果樹園内でカメムシ類を確認した場合には, 活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。

多目的防災網(6mm目または9mmクロス目以下)を張ると防除対策として有効である。

夏ネギ

1. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

例年 6 月から発病が見られるが, 本年は 5 月下旬の調査で発病を確認した。5 月下旬現在, 発病度及び発生地点率は県南・県西地域で平年より高く, 県央地域で平年並である。

気象予報によると, 向こう 1 か月の降水量は平年より多く, 日照時間は平年より少ないと予想され, 発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

前年発生が多く見られた圃場は発病状況に注意し, 発病が見られたらただちに防除を行う。発病初期の防除に重点をおき, その後の発病状況に応じて追加防除を行う。

薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に行う。また, 薬剤を散布する際は, 収穫前日数に十分注意する。

(P.7 病害虫ミニ情報 参照)

小麦の赤かび病について

～ 赤かび病粒の混入を防止し, 高品質麦の生産に努めましょう!! ～

収穫が遅れると, 赤かび粒から健全粒へと感染が広がるおそれがあるため, 適期収穫に努める。

収穫時には, 赤かび病が発生している圃場は刈り分け, 赤かび粒が混入しないように十分注意する。

収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。小麦の調製をする際に, グレーダー網目を基準より大きく(2.4mm以上)すると, 赤かび粒の混入を軽減できる。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	黄化萎縮病	-	移植後 10～50 日の間に冠水すると発生の恐れがある。常発地で冠水した場合には、防除を行う。
	イネミズゾウムシ	発生量：やや少ない	5 月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。イネの初期生育が遅い水田，育苗箱施用剤を使用していない水田では発生に注意する。
ナシ	アブラムシ類	発生量：少ない	5 月下旬現在，平年より少ない発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年並の発生である。
	べと病	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年並の発生である。
カキ	炭そ病	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年並の発生である。
	カキクダアザミウマ	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年並の発生である。
夏ネギ	黒斑病	発生量：平年並 ～ やや多い	5 月下旬現在，平年並の発生である。向こう 1 か月の降水量は平年より多く，日照時間は平年より少ないと予想され，発生を助長する条件である。
	さび病	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。向こう 1 か月の降水量は平年より多く，日照時間は平年より少ないと予想され，発生を助長する条件である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並	5 月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少ない	5 月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
スイカ	炭そ病	発生量：やや多い	5 月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
半促成ビーツマン	うどんこ病	発生量：平年並 ～ やや多い	5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	ハダニ類	発生量：やや多い	5月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
抑制トマト	黄化葉巻病	-	育苗ハウスは開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置し，育苗時か定植時に粒剤を施用する等，媒介虫のタバココナジラミの防除を徹底する。

施設野菜の栽培終了後の管理について

コナジラミ類，アザミウマ類，アブラムシ類は，各種ウイルス病を媒介するので，作物の株元を切断し1～2週間程度ハウスを密閉する蒸し込みを行い，ハウス外への飛散や次作への持ち込みを防止する。

蒸し込み終了後は，作物残渣のハウス外への持ち出しを徹底し，罹病残渣からの各種病害の伝染を防止する。

水稻の主な病害虫と防除対策について

水稻に発生する主要な病害虫には、いもち病、斑点米カメムシ類、イネツトムシなどがあり、いずれも十分な注意が必要です。

病害虫の主要発生時期及び防除時期を下記に示します。年により発生時期・発生量の変動するので、水田をよく観察して病害虫の発生状況にあわせた効果的な防除を行って下さい。

発生活消長と防除の概要

今年の発生状況及び防除対策については、毎月発表される病害虫発生予報等を参照して下さい。

- 1) いもち病：葉いもちは6月下旬から発生し始め、7月下旬にピークとなる。梅雨明けが遅い場合には病勢が進展し、出穂後に降雨が続いた場合は穂いもちが多くなる。穂いもちの防除は、穂ばらみ末期～穂揃期に行う。粒剤を使用する場合は出穂前に散布する(薬剤によって使用時期が異なるので注意する)。
- 2) 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ)：成虫は水田周辺(畦畔含む)のイネ科雑草等からイネの出穂とともに飛来し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。ふ化した幼虫も同様に穂を加害し、加害は収穫期まで続く。防除は成虫が飛来する出穂期～穂揃期及び幼虫が発生する乳熟期～糊熟期に行う。
- 3) イネツトムシ：幼虫は6月中旬～7月上旬及び7月下旬～8月中旬に発生し、葉を食害する。7月下旬から発生する第2世代幼虫による被害が大きい。防除は7月末～8月はじめに行う。
- 4) ニカメイガ：第1世代幼虫による被害は心枯れ茎、第2世代幼虫による被害は白穂となって現れる。第2世代幼虫を対象とする防除は、8月上旬～中旬に行う。
- 5) イネドロオウムシ：成虫は5月上旬から6月にかけて水田へ飛来し、葉に産卵する。幼虫は6月上旬から発生し始め、梅雨明けまで加害する。幼虫の発生が多い場合は防除を行う。

表 水稻において近年問題となっている病害虫の発生と防除時期のめやす(6月以降)

時期	6月			7月			8月			9月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
イネの生育							出穂	乳熟	糊熟			成熟
主要病害虫	いもち病	葉いもち対象			葉いもち発生ピーク			穂いもち感染時期				
	クモヘリカメムシ				イネ科雑草に生息			成虫飛来ピーク				幼虫発生期
					多発水田では青立ち							玄米加害
					イネ科雑草を除草							
イネツトムシ					第1世代幼虫			第2世代幼虫				
								食害のピーク				
ニカメイガ					第1世代幼虫			第2世代幼虫				
					心枯れ茎			白穂				
イネドロオウムシ					第1世代幼虫							
					食害のピーク							

注1) ← - - → : 発生活消長 ← → : 被害 ← = = = → : 防除
 注2) 防除時期は平年の発生をもとにしためやすなので、病害虫発生予報を参考に、水田をよく観察して防除を行う。
 注3) 5月上中旬移植、中生品種の場合。

ネギベと病について

茨城県の夏ネギにおけるべと病は、6月に最も発病が多くなります（図1）。特にここ数年多発生が続いており（図2）、平成20、21年には病害虫発生予察注意報を発表し、防除の徹底を呼びかけています。本年の発生は5月下旬現在、発病度が11.2と平年に比べ多くなっています。また昨年も多発生したため圃場内の菌密度は高まっていると考えられ、梅雨期は発病好適条件になりますので、今後の発生に十分注意して下さい。

【病徴と伝染経路】

春や秋に感染したネギ葉には、はじめ輪郭がはっきりしない長楕円形で、薄緑色のぼんやりとした病斑を生じます。その表面の白色のかびは、間もなく色が濃くなって紫黒色となります。病勢が進んだネギは、病斑が黄白色や灰白色になって株全体が枯死します。

ネギべと病菌は、卵孢子や菌糸の状態では被害植物上で越冬し、気温の上昇とともに分生子を形成します。分生子は、周囲の株に飛散して病害を拡大させます。

【発生しやすい条件】

平均気温が15～20で、降雨が続くと多発生する傾向がありますので、春先に気温が高くて降雨が多い場合や、梅雨や秋の長雨の期間が冷涼で曇雨天が続く場合には発生が多くなります。

またネギべと病菌は、圃場に残っている株や被害残渣上で越冬しますので、前年に発生が多かった圃場では特に注意が必要です。

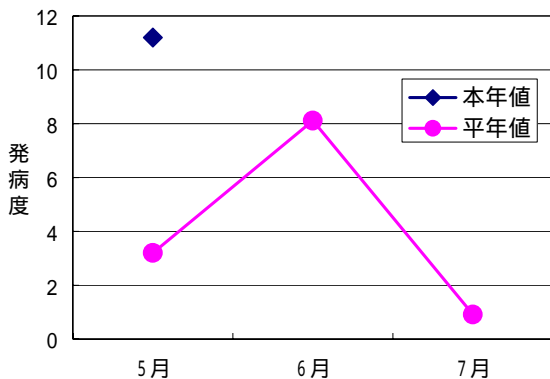


図1 ネギべと病の月別発病推移

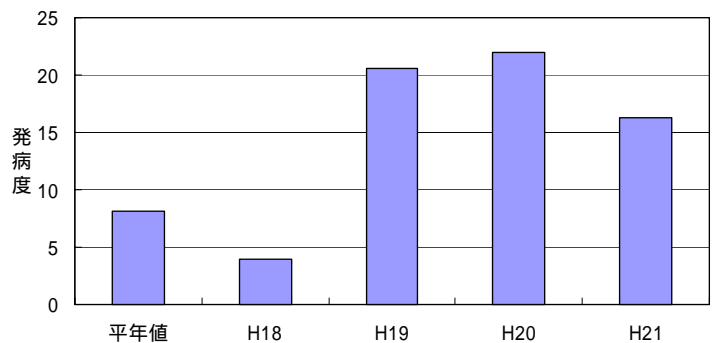


図2 過去4年間の6月におけるネギべと病の発病度

発病度：25株中の発病の有無を調査し、葉の病斑面積から次式によって算出した値

$$\text{発病度} = ((4 \times A + 3 \times B + 2 \times C + D) / (4 \times \text{調査株数})) \times 100$$

A: 全葉面積の31%以上に病斑が認められる株。 C: 全葉面積の11～20%に病斑が認められる株。

B: 全葉面積の21～30%に病斑が認められる株。 D: 全葉面積の1～10%に病斑が認められる株。

(参考：全てAの場合は100、全てDの場合は25、全て無発病の場合は0となる。)

【防除対策】

多湿条件は発生を助長するので、圃場の排水対策をしっかりと行って下さい。

肥料切れや多肥栽培を避け、適正な肥培管理を行って下さい。

薬剤散布は、展着剤を加用して葉身にしっかりとかかるように丁寧に行って下さい。なお薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意して下さい。

薬剤散布後は防除効果を確認し、効果が得られない場合は、追加して散布することになります。その場合は他系統の薬剤を使用し、ローテーション散布を心がけて下さい。

被害残渣は伝染源となるので圃場内に放置せず、圃場から持ち出し適切に処分して下さい。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 5月22日から6月21日)

気象庁 (5月21日 発表)

< 特に注意を要する事項 >

期間前半は、気温が低くなる見込みです。農作物の管理等に注意して下さい。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	40	40	20
降水量	関東甲信全域	30	30	40
日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は平年と同様に曇や雨の日が多い見込みです。

< 1週目の予報 > 5月22日(土曜日)から5月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率50%

< 2週目の予報 > 5月29日(土曜日)から6月4日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率50%

< 3週目から4週目の予報 > 6月5日(土曜日)から6月18日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

・ テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号 : 029 (226) 5321

6月上旬 麦類、ナシ、ネギの病害虫について

6月下旬 水稻の病害虫について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず、良く洗浄しましょう。